



大倉孫兵衛梓
周延榮

二篇下

へ14
2688
6



二篇中

へ14
2688
5



二篇上

へ14
2688
4





~14
2688
4

二篇上





海上
新報



新年告る鶯の先と拂ひ鳥追も今昔の春とぞ
ありある。勤番の唾涎の髭と傳ふて長く海上遙の
音の三絃のいと細し。拔衷と巡廻りて新道ふ至り。多錢貫
ひ得たり。馴染の門と一絶の狂詩當時の形容と看るふ足る。
阿松が傳の長物語久し續け久保田の筆が諸君
の御意ふかき讀新聞その結局と二帙よ納めて世の
勸懲ふ供ふる者。同氏が繫机の餘力に於て顛了り
て末と示し記者の注意とりあも可あらん

明治十一年一月

假名垣魯文叙



河米女後上



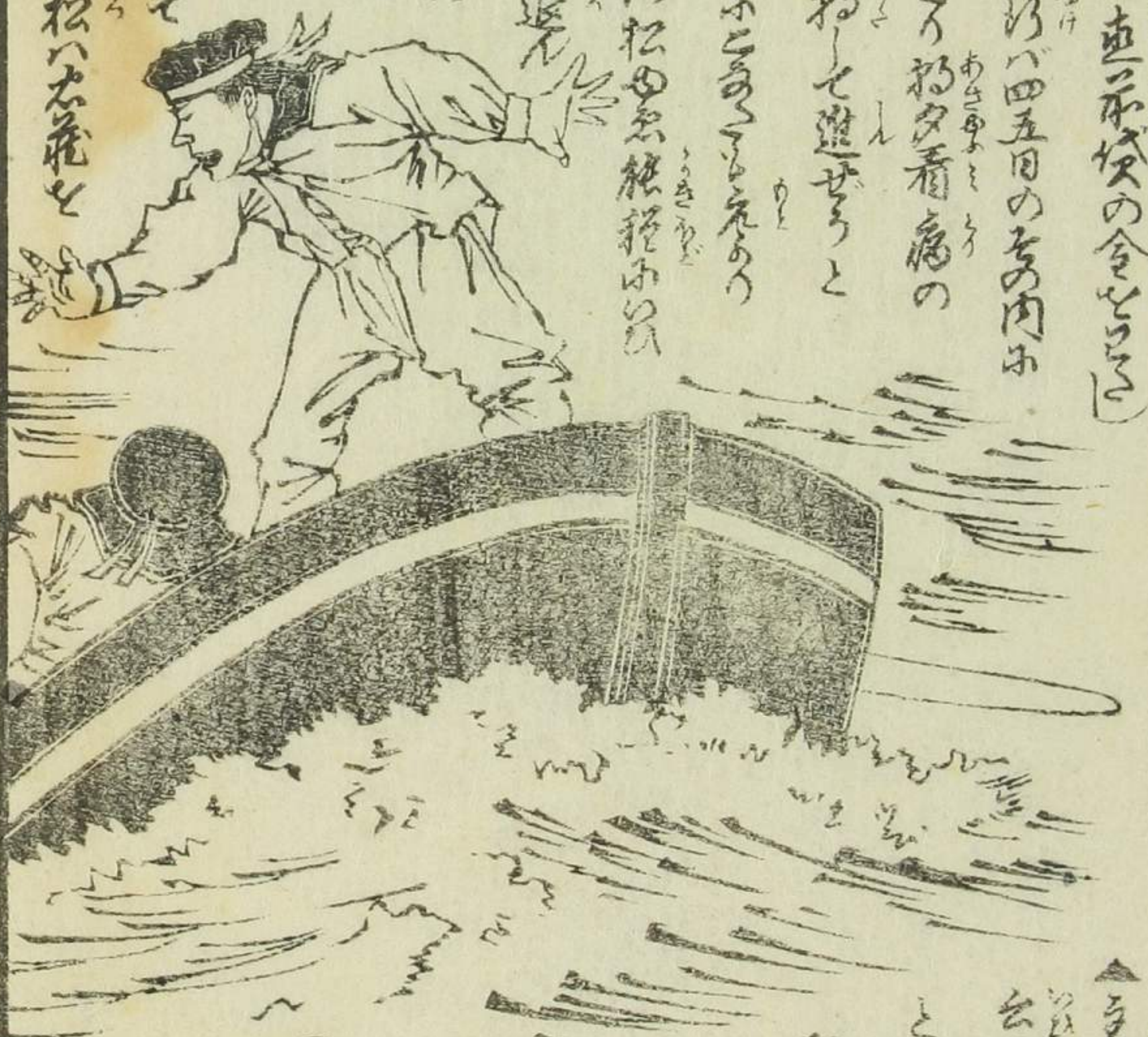
阿木女後上





所 本 後 1

ついでとも後合つて直平侯の令を以て
 駿府へお茶を運ては四五日のうち内小
 右衛門の廊下へお入りお茶看病の
 出来ぬ世帯も持て遊せうと
 木小幡のあつお供小もあつて元あり
 忠義と持るふの阿松も忠義持小の
 此ら一交らと互還え
 と互い小供へまの
 狗もくつてお返
 りつと小尾小付て
 定は奔も何のじて
 おりりい後河松へお花を



まのり
 直平侯と直出
 右衛門の令
 と遊極極め
 木小幡のあつ
 忠義と持るふ
 此ら一交らと
 と互い小供へ
 狗もくつてお
 りつと小尾小
 定は奔も何の
 おりりい後河
 松へお花を

種々小多にら一トを駿府へ
 ともお供も中個ひう彼の定
 公前ももははと清世に子連小水
 知て令二十田へ車ももはは阿松
 と駿府へ連行んと清の松小松と
 狗もくつてお返
 りつと小尾小付て
 定は奔も何の
 おりりい後河
 松へお花を



古々といふ
 と清世が
 清りあて
 好る病
 若小水
 つめられ
 長死若
 痛由
 あつての
 内飛結小
 駿府の令
 直平侯の令



林ありぬきの株と名へば阿松が紐ふた
 まるり放がごまき昔もろく生を五のハ

急もそくしゆき
 度をはして入
 来り目と
 あぶされ
 手拭ひで
 涙と金ぞ
 傍小座
 換ふいあれ
 ある襖紙で
 のらふに
 まて承知
 去る(次へ)

川太公後上



つぎ今又方と生あそとあへば世ふ方久あは運命に
 秋高の上のそをいふが揺らめいとホロリと落すひと
 糸を糸阿松へ候々拭ひ又の糸を換ふ人細いと
 とまゆとまゆはるる是が百里も隔つてまよ又あふ
 この難からんが僅十甲の樹乃つと自捕
 こまゆの通る松が彼地一とまゆ
 世ふお糸と逆ひふよはは
 こ初の真まじしお情で
 看痛まるがぬふ
 度とまゆもゆの
 内必らばお糸はまよふ
 おふてでさんまるとおむせぬ候ふお糸の

△涙雨を
 苦痛
 小
 松
 中
 梅ハ茨
 の憂い
 尖ハ
 とは
 折る
 ば糸
 梅の月





千代子

二篇中

へ14
2688
5

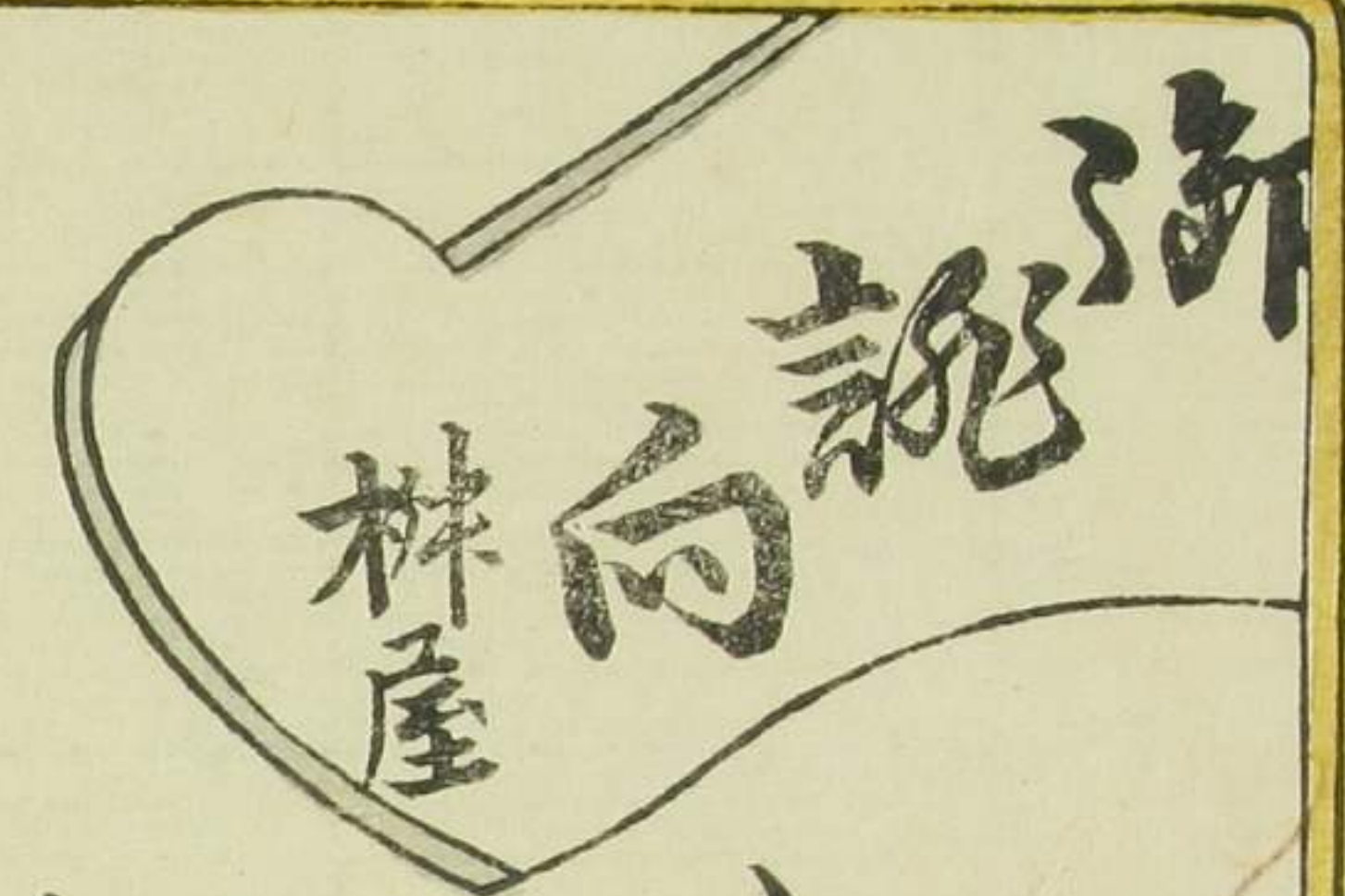


○漁舟の
 やの影は
 波を焼と根中
 のゆり物因雨雲
 のゆり物因雨雲
 のゆり物因雨雲

△先づ浪辺の
 波打際
 松のまがらみ
 返す波の花宴も
 風を吹て
 星は小窓に
 星は小窓に

●北の岸
 ついで
 三枚
 舟で

14
 2688
 5



海上新証
 白林屋

俊名垣魚文閣
 久保田彦作
 錦葉堂書梓





浦糸路の同屋場と世灯りも消くの中あつた
 三様が度申城も打城たる様も後と乾けき松の梢
 小糸の髪もさざる小夜花の端傾く掛鎖は
 田通園の文字いそえ
 れど今い
 妹をて
 蜘蛛の糸
 おかると親
 の
 傍へか
 おりて
 汗と拭ひ彼と人の人足へ

〇といふ所松の葉の縁をのぞ
 さうやを穿てを傍をらんおらん小糸の髪もさざる
 親の髪もさざる小夜花の端傾く掛鎖は
 〇といふ所松の葉の縁をのぞ
 さうやを穿てを傍をらんおらん小糸の髪もさざる
 親の髪もさざる小夜花の端傾く掛鎖は



〇といふ所松の葉の縁をのぞ
 さうやを穿てを傍をらんおらん小糸の髪もさざる
 親の髪もさざる小夜花の端傾く掛鎖は

〇といふ所松の葉の縁をのぞ
 さうやを穿てを傍をらんおらん小糸の髪もさざる
 親の髪もさざる小夜花の端傾く掛鎖は



純 軒屋

つぎ 芳れが如て着せ
破る 浪の着落く
賑りのあるの
これと衣の束の
奥侍との格一めまゝ
のま びて可き

● 公村がきて
阿松の二人小向い
「さして見よ」
と 氣達がかのひの
「イヤ
誰でも
定片布さる」と 親
坐の麻とあけ立出
一個の男侍と見お 椽鼻
小腰打掛て阿松小向い
裁り 梅小人守の裁り
正(連)と 兼士が指



いそがし
僕もでたまう様一
いねねとついで一人がま
かて「おの寂しいが」方のつめ人
里教をくば打勝神ふわのく 漢舟より外お主人の
す安んくお出のせと有れぬの 婿小松の程も不審
これに「三三は様様へお出のせと有れぬの 婿小松の程も不審
今のお茶の何とはお出のせと有れぬの 婿小松の程も不審
由良吃驚するのいもねが お茶と女連出く云はる程力の●と阿松のいもねへ

下し小次郎
冷と糖の
いよ上小好
不審由
むもさるの女い
ねなれど後狗のま
つて不貞なれあま
「さして見よ」
と 氣達がかのひの
「イヤ
誰でも
定片布さる」と 親
坐の麻とあけ立出
一個の男侍と見お 椽鼻
小腰打掛て阿松小向い
裁り 梅小人守の裁り
正(連)と 兼士が指

挑灯不遺一毛を以てつるの如く後府へ松と抱え小事もこのいふお前へ祝言定は
 さへ月半内余り清良をとりしも前とは西引上りやうとあつて増えたりうとあつ
 休切らじの六返月えごあまの二千田かゝるまが引合の
 飛ひの外は夜焚焼玉と抱ふと又このうと又
 お怒る悪徳に又侍連姿に長衣見り
 女房と知也角出村小仇名のお見
 面縋ひ松と枝布小を以て紙小
 色と酒もの様金サチ舟おご
 人足小後せんは遠く二人のれも
 そとく泉出にかるむ花の室をすくともおられも飛い
 糸つげ小糸束一通へつらひく○次小糸束も交りて
 いやく海面をりて備へ空さ之風小糸束を以て通す
 吹風へ松の梢小糸束を以て通すも通す
 若と目をつけて
 ぶらうまにの色



蘇散り松を以て集めて櫻提の大打
 衣を二面出若井の襟小提不ち後
 せんは燃る松枝の煙りに移ふ勝月
 此阿松のまよとて
 傍へ引寄せせまる
 されうをうらうのひ
 此とと芝居をまはる歌後
 のせりふの中うがふは先月
 申句は二海のとちの持身で
 獨りつ活衣の上ツ張髪も丸
 まで横格小女れと敷の極瘦
 の姿があつと目ふとまゝ又夫婦
 の縁とあつては



あつあり
 と抱て
 女房と
 おひそめ
 惚い思ふ
 女房の先小
 あつて二
 女房と
 女房と
 女房と

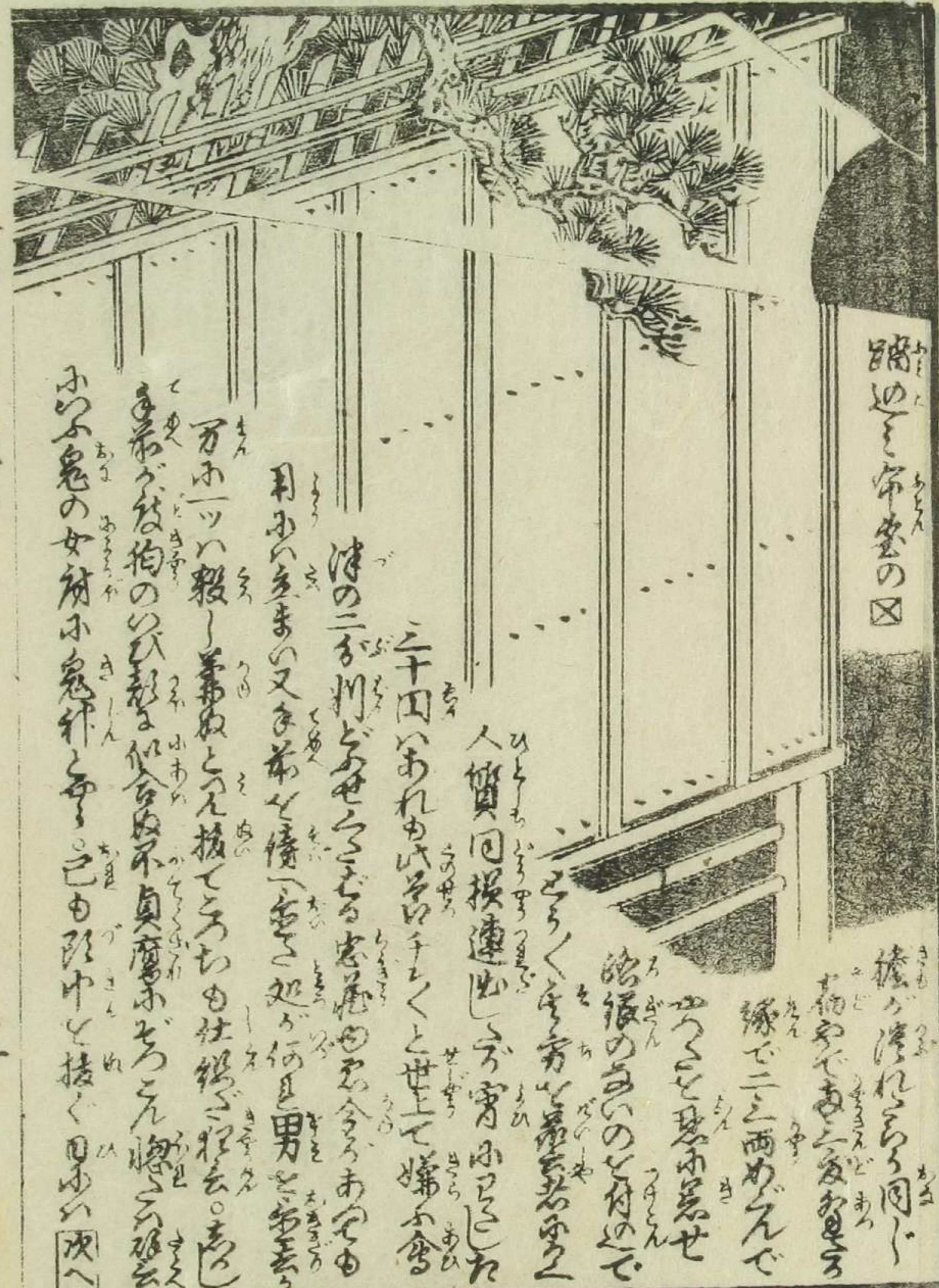
つぎふかき旅の仕立蒲束道行とせむ
それ まうらうの忠告が病ひのふあふふ未だ
あり かあつちまき まうらう
あつと藤付永の道るまうまうらうの



▲敬るく
ごらうがのつぎ
よあけ あいせとあや
夜更ふ合宿の客が
ねまじり
旅達の仕立へ

と 何ん かも さに されが 奪とも と 張が 踏し 引 糸布 下ろす

踏めて命案の



人質同振連出さず宵小にされ
二十田いあれもいそひ千とくと世上で嫌ふ合
津の二が州とあせらるる忠告のあふふあふふ
用いひまの又き茶を懐へて廻り何れ男とあふふ
万が一ツの殺し幕取とん抜てふあふは結ぶ程云。あふ
まがが後物のいひ形も似合ぬ不貞魔ふとろえ惚ふ程云
あふふ鬼の女附小鬼付とや。已由路中と抜く日あふ入



乙の五
 のぬり
 せが
 荒
 ちて
 抱て
 ぬると
 阿松
 て

乙の五
 のぬり
 せが
 荒
 ちて
 抱て
 ぬると
 阿松
 て



さんねへでも
 むの體おらんと
 返りしとあそらな
 おどつじの曲つて
 ねの生れまゆめお

乙の五
 のぬり
 せが
 荒
 ちて
 抱て
 ぬると
 阿松
 て

波の音吹散るゆふの寝立の寝着事と丸
 おもひより阿松の侍の磯割松の舟仲文小
 究まれ小枝まじり柄の後り遊とすると
 付入る後遊をあらう大力を双あれば
 ちんちあぬぬ松の木放軒小
 ちんちね板じかせんと
 近寄るも先をあらう
 糸阿松の一生氣
 命あれは皆付力や
 秋分小入る身とよせ
 ちんちる松の枝ツツリ
 折て磯際より阿松の糸さる海の
 中(生)運さるゆふ入るの想の報ひり



△東京の世漕丸といふ
 蒸乳船を舟戸導
 何れ
 甲板
 沖の方
 後
 遠くあき

糸阿松の十返り波のまわく
 妻小波の引波小看るくえええ
 ありにり○波の表も引波と無
 糸阿松の沖小流見離れ松が
 深とありあけ今あつた
 ありれと習ふお糸阿松
 沖あるまは抄瀬の
 外海もて山あす
 備打のく替へお糸
 深見思子身の底小沈む
 あんしげ日ハ見船流二年十月廿日
 の事ありしが空小一返の思ありあつた
 旭の光りつらうくと夫と実如く小をりまわハ



小波の
 阿松
 深の
 糸阿松
 沖の
 後
 遠くあき

ついでに宿願もどし阿松は美性あり兼て
 付る忠義も有り後の拵の徳也と大坂の老翁
 傳へて傳世也
 昔以神戶一息
 本由志
 二三月と
 短て固
 港へ渡



く思
 報せし阿松の
 心小里 横右の 赤糸へ 懸る 阿松の ためと なる 傳世も されば
 河松

● 初あふんとひて
 さらばむ小持也

▲ 小 轉

此物語を捧じて是れが實状ある所や忠義も兼ねて
 先老も南も是と云ふも上まゝ
 何と云も彼ホと云ふ



と
 大坂の
 横右の
 足袋ももて掛や
 忠義といふ者いふ方の
 縁のゆへに方訂後
 下されといふ船羽人と云らば彼忠義兼て唯其の形の以牙を物傳る小
 忠義といふ不審とねども彼女に洗拭あねば後小あくお括し中ふらば
 連ぬり
 次へ



阿松の
 仕淋
 たる
 阿松
 とい
 成目

肝の
 家

〇心地
 の
 考
 示
 止
 と
 海
 路
 の
 道
 へ
 登
 る

取
 寄
 け
 ら
 れ
 ぬ
 出
 立
 手
 小
 女
 共
 々
 秋
 衣
 の
 着
 せ
 ぬ

の
 中
 へ
 後
 深
 の
 水
 へ
 入
 り
 ぬ
 世
 間
 へ
 入
 り
 ぬ

〇不
 行
 の
 花
 さ
 ん
 の
 泣
 き



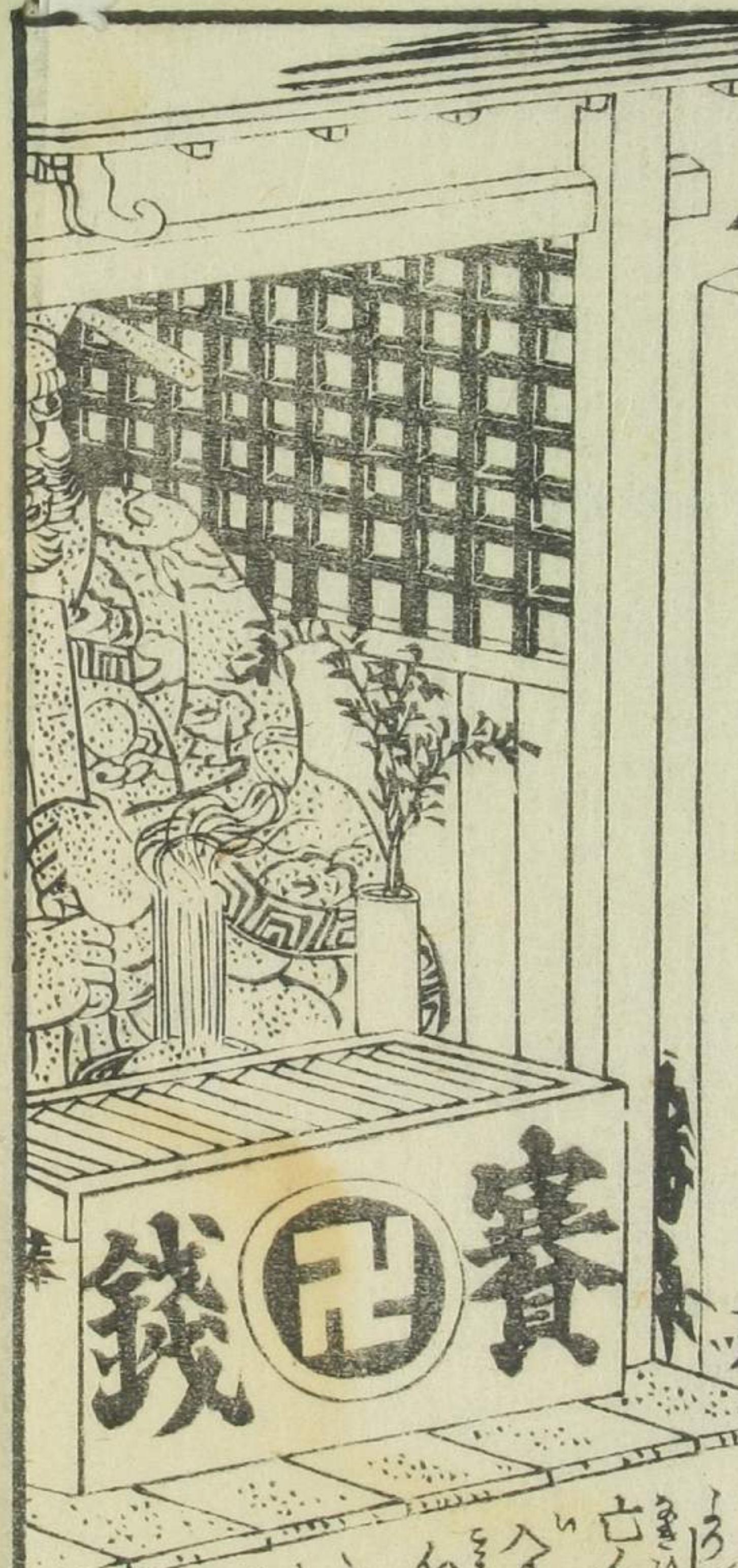
〇中
 後
 河
 松
 の
 忠
 義
 事
 方
 〇心
 地
 の
 考
 示
 止
 と
 海
 路
 の
 道
 へ
 登
 る

〇心
 地
 の
 考
 示
 止
 と
 海
 路
 の
 道
 へ
 登
 る

〇心
 地
 の
 考
 示
 止
 と
 海
 路
 の
 道
 へ
 登
 る

〇心
 地
 の
 考
 示
 止
 と
 海
 路
 の
 道
 へ
 登
 る

互ひ小 あひひこ
 合邦ヶ辻 あいつがつじ
 賽 まは
 銭 ぜに
 出 で
 下巻



源氏五十四条

二帖 源氏五十四条

日本物産圖會

五帖 日本物産圖會

佛傳三十六花撰

一帖 佛傳三十六花撰

東京開化卅六景

一帖 東京開化卅六景

小葦入門彩色八

一帖 小葦入門彩色八

尺一寸珍本

一帖 尺一寸珍本

鹿兒島實記一夕話

三冊 鹿兒島實記一夕話

鳥連於海上新話

三冊 鳥連於海上新話

尺後

三冊 尺後

古今名婦傳

一帖 古今名婦傳

谷

和漢書籍

東錦繪問屋

吉板御居

編輯 久保田彦作
 東京 天區三小區區丁目十九番地
 大倉孫兵衛





鳥追阿松海上新話
後篇

大倉孫兵衛梓
周延

二宮下

~14
2688
6



阿喜
海丘
新張

錦葉堂持



申すに... 海小... 幸命... 助...
始終も... 誠と... 交て... 表れ... 入... 忠... 忠...
海石... 血筋... の... 忘れ... 幼少... 附... 小...
世と... 交て... 終... 忠...
去... 来... 只... 先...
主... 海... あり...
將... 因... 立... 海...
弘... 以... 阿... 松... 守... り... の... 祖...
と... 中... あり... 面... 出... 梅... の...
徳... 虫... 主... 婦... の... 重... 押... 留... 居... け... ち... あり... と...
控... 扱... と... け... り... の... 出... 中... 由... 圖... 方... 以... 一... 目... 小...
か... ら... 入... 初... め... て... 放... 何... と... せ... ち... と... 拘... 由... 小...
あ... ち... ち... 下... され... 有... 合... 情... の... 掛... 状... よ... り

秋... 子... 緑... あり...
大... の... 髪... 根...
先... あり... フツ...



○子細あつて幼おのと死

阿松が脊の
あてさすの何
らで定ハ
感満さ
お人の命由所と
下さるま
と味と憐実小
色も阿松が
百景那の女舌
お人の命由所と

にやへきりふ満家の
の松屋とやうな家
はたき送りしお状
中り身ひの女
のこまじりば
あつて幼おのと死



蓮葉のいさだをえを
おのこまじりば
あつて幼おのと死

阿松が拘束の熱湯もえりの不故の
 女ままた茶碗を破れとてあけをんとす
 折も情達の薄子の内小あひがひあり
 男の怒天編組の女結と交うけり
 且そ拘小ギツクリあつたあつた
 湯寒ま茶碗も破れゆ
 三人驚く〜〜驚え合せ
 志所河もあつたけり方へ
 子押めて耕く立出再び
 智うけ天さりの書進ひ阿松も
 由初く〜〜大抵の善く六書小又り
 致るく〜〜彼侍ひい〜〜に
 阿松とハタと白服の子は
 びろろ〜〜と半君の演因といふと



市改のゆ法あり
 松登の代を
 釘とされ〜〜

阿松が拘束の熱湯もえりの不故の
 女ままた茶碗を破れとてあけをんとす
 折も情達の薄子の内小あひがひあり
 男の怒天編組の女結と交うけり
 且そ拘小ギツクリあつたあつた
 湯寒ま茶碗も破れゆ
 三人驚く〜〜驚え合せ
 志所河もあつたけり方へ
 子押めて耕く立出再び
 智うけ天さりの書進ひ阿松も
 由初く〜〜大抵の善く六書小又り
 致るく〜〜彼侍ひい〜〜に
 阿松とハタと白服の子は
 びろろ〜〜と半君の演因といふと



阿松の情向と
 釘とされ〜〜



上つらふ今更色も冷き夜をば身の上の
 打明せぬ世の小家の橋の身の上
 幼少尉の母親がやむに替はる
 新内常盤の法
 桐子つぎ来女
 弟の落葉美強で
 糸三所松と



美師へ所松のあはれ
 首尾少く針はねんと
 処子も拙者探偵
 彼奴が化之正体を見
 せり
 悟
 毒
 婦
 死



女とのものごころ
 か二人のおもさを物
 かてあつらふと物せ
 ねる

美人長か何の
 彼とのつれづれ
 の心や二人の
 高き色色
 月と四奏もだんく
 越へ遠物瀬川中津
 大難の七十五里の海
 とおるあはれ
 救助の命令
 誓と切て誓
 の内多きとあやうと
 のあはれ
 水の石を海今更色も冷き夜をば身の上の
 彼奴が化之正体を見



たのびに色をば所松の上の
 犯死人拙者のあはれ
 自ら縄打引ねんと門は下り
 きて利家の通面あはれせり
 四方をえ強りし縁悪ひの丸
 ちん三尺持と
 まよふ
 一
 家



のまの
 権切あどけ
 阿松とてい
 のまの
 阿松とてい

吉
 阿松とてい
 のまの
 阿松とてい

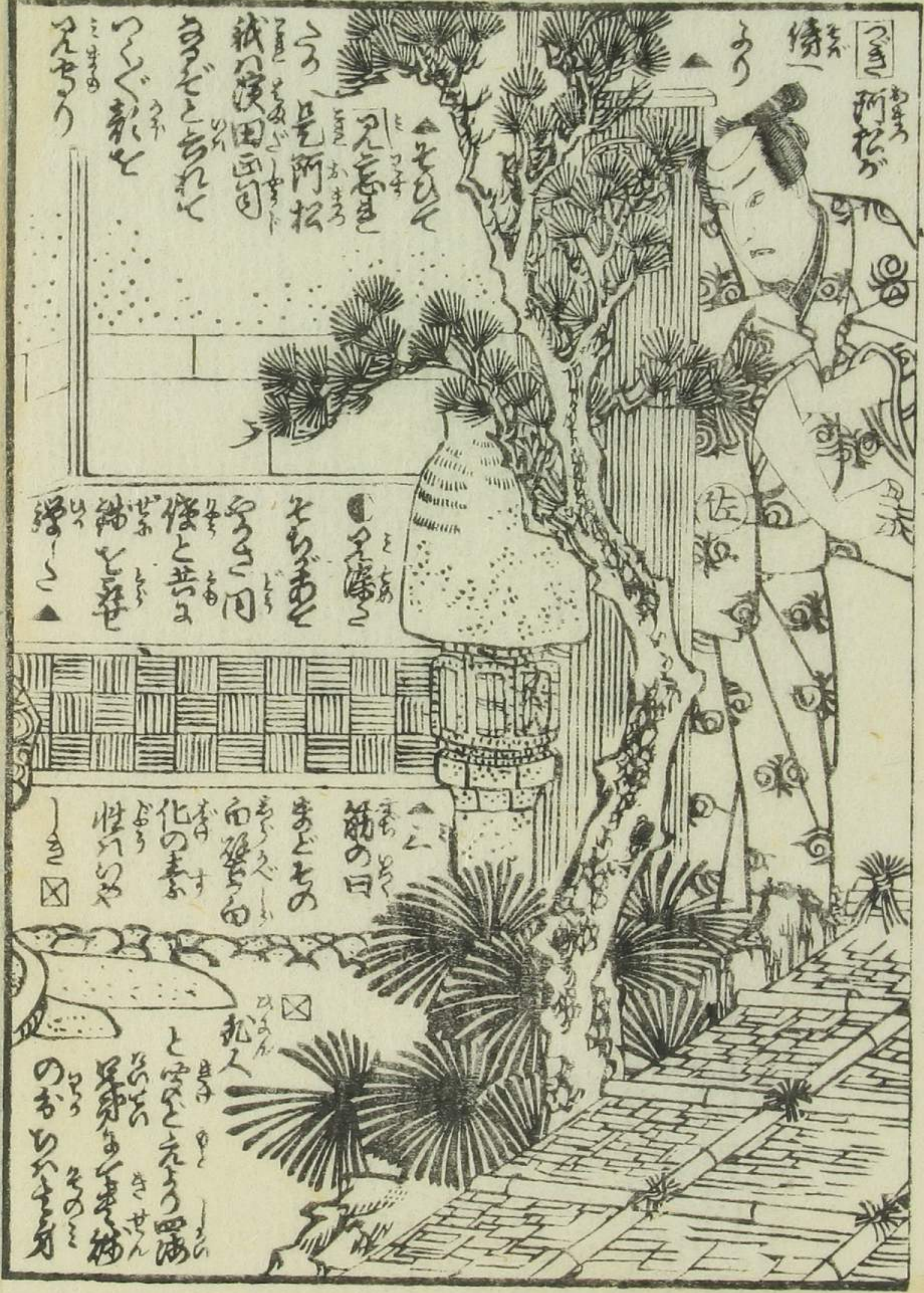
阿松とてい
 のまの
 阿松とてい



阿松とてい
 のまの
 阿松とてい

阿松とてい
 のまの
 阿松とてい

阿松とてい
 のまの
 阿松とてい



阿松が
 兄さま
 是阿松
 紙の渡田田
 多ととあれは
 つくぬれと
 兄さま

佐
 兄さま
 兄さま
 兄さま
 兄さま
 兄さま
 兄さま
 兄さま

兄さま
 兄さま
 兄さま
 兄さま
 兄さま
 兄さま
 兄さま



果報
 果報
 果報
 果報
 果報
 果報
 果報

果報
 果報
 果報
 果報
 果報
 果報
 果報

果報
 果報
 果報
 果報
 果報
 果報
 果報

〇 日本外史
 〇 法律書
 〇 翻譯書類
 〇 大坂志願

〇 阿部 後下
 〇 阿部 後下
 〇 阿部 後下



〇 阿部 後下
 〇 阿部 後下
 〇 阿部 後下

日本外史



〇 阿部 後下
 〇 阿部 後下

〇 阿部 後下
 〇 阿部 後下
 〇 阿部 後下



ついでに…
 花と藻と…
 阿松…

あま…
 一冊…
 二帖…
 三帖…

以下
 大倉…
 大倉…
 大倉…

田舎源氏五十四条 二帖 長…

大日本物産圖會 五帖 大…

能優三十六花撰 一帖 千代…

永開化世六景 一帖 孝…

入門彩色入 一帖 諸…

鹿兒島實記一夕話 三冊 重…

鳥連夜夜海上新話 三冊 百…

古今名婦傳 三冊 新…

谷 和漢書籍 問屋

編輯 文保田彦作 大倉孫兵衛





鳥返抄

海上新話

二編

假名垣魯文閣

久保田彦作著

陽物高周延画

錦榮堂梓

14
2688
4-6

